

僕は、  
字が読めない。  
(2)

小菅宏

集英社インターナショナル  
ウェブ立ち読み

第一章

母と息子の「五〇九日」

## 不登校、入院、そして自殺未遂

新潟県立六日町<sup>むいかまち</sup>高校二年の二学期（二〇〇一年十一月十九日）から南雲<sup>なぐもあきひこ</sup>明彦は不登校になり、自宅で引きこもりとなった。その日から、母である信子<sup>のぶこ</sup>（元湯沢町役場所属保育士）は『明彦の状況』と題する記録を<sup>しよ</sup>記し始めた。南雲が自立を目指して東京に出るまでの母と息子の闘いの「五〇九日間」。この母のノートを背景に南雲自身の告白を記していく（個人情報保護のため、一部ノートの文章を改めた）。

一月一九日（月）（明彦が）学校へ行けなくなる。

高校に入った直後から、僕は授業を受けることに大変な苦勞を覚えるようになりました。教師が黒板に書く文字がぼんやりとしか読めず、授業の内容をノート（書き取り）することができないためです。そこで黒板の文字を書き写すのではなく、教師の話す言葉を頭の中でオウム返しに繰り返して、それをノートに書き取ることになりました。

一口に「読み書き困難」といつてもディスレクシアの人々の文字の見え方はさまざまである。彼らは風景や人の顔を認識することは人並みにできる。しかし、ひとたび文字を読もうとする時、南雲のように文字が霞んで見える人もあれば、波打って見える人、鏡に映したように左右逆転して見える人もいるという。

僕のノートの取り方は大変に神経と体力を必要とする作業だったが、それでも一年生のときは頑張れました。ところが二年に進級して授業内容が濃密になり、大学進学を視野に入れる時期を迎えると、僕の成績は下から数えたほうが早いランクまで落ちました。担当教諭から追い討ちのように、「現状のままでは志望大学は無理」と指導されて愕然としました。

でも、担当教諭に、僕は黒板の文字が普通で読めないのですと「告白」できませんでした。その反動のせい、「このままじゃだめだ」と気持ちが物凄く焦ってしまつて、勉強をするにも集中して打ち込めない日が夏休み前からつづきました。

僕の実家のある越後湯沢あたりは比較的、大学進学熱が高い地域です。兄も大学に通っていましたし、当然に僕も大学に進学するものと思っていました。しかし、僕は文字を読解するのに友人たちより遅れてしまう。いったいどうすればいいのかと悩んだまま二学期

を迎えました。九月、十月と過ぎていくうちに学業の遅れに対処できない苛立ちがげしくなり、十七歳の誕生日（十一月二十六日）間近に、高校へ行けなくなりました。部屋に閉じこもり、人並みのことができない情けない自分がゆくて、自分を殴りたい気持ちで過ごしていました。

JR上越線<sup>じょうえつせん</sup>で自宅近くの越後湯沢駅から、高校のある六日町駅まで、電車の乗車時間はわずか十五分間なのだが、その日（十一月十九日）の南雲は乗客の視線が怖くて、越後湯沢駅の構内で全身がふるえ、足がすくんで動けなくなつたのだ。結局、この日は学校を欠席する。

（南雲信子の証言）学力が目に見えて落ち、不登校になる直前、明彦は雑誌広告で見た通信販売の「速聴<sup>そくちやう</sup>」の機械を購入しました。黙読するのが人より五倍ほど遅い明彦は、この機械を利用することで自分の難点を克服しようと思つたのでしよう。本人は必死に考えてやつたことですが、「そんなことをしても仕方ない」と、私は素人目にも感じていました。でも届いた機械を懸命に操作する本人の後ろ姿を見て、何も言えませんでした。

この時期、もっとも身近にいた母親は、機械によるトレーニングなどでは問題は克服できな

いと感得していた。原因はもっと違うところにある、と感じていたのだらう。だが、現実問題として医療機関（南雲はその頃すでに、地域の医療機関でカウンセリングを受けている）から具体的なアドバイスや診断を受けたわけではない。ましてや、先天的な脳の機能不全だとは母も子も思いもしなかったのだ。

あの頃の僕は「自分は学校があれば好きなのに」との悔しい気持ちを持って余して、呆然ぜんとしていました。この気持ちを誰に伝えていいのかも分からず、部屋で悶々もんもんとして眠れず、気がつくと朝でした。十一月十九日、身体が動かさず、高校へ行けなくなつたのです。うつ病で暫くしばらく休む、との手紙を担当教諭へ渡してくれるよう友だちに頼みました。

LD（学習障害）を含む「発達障害」とは脳の機能障害であり、その多くは先天的なものとされる。発達障害の原因を親の養育姿勢や家庭環境、TVの長時間鑑賞などに求める議論は、研究者の間で否定されている。

発達障害には、いわゆる知的障害のほかに、自閉症、アスペルガー症候群、LD（学習障害）、ADHD（注意欠陥・多動性障害）など、幅広い障害が含まれる。このうち、自閉症、アスペルガー症候群、さらにはADHDやLDなどは、知的障害とは直接の関係はない。たとえばA

DHDの場合なら、極端に集中力が欠け、落ち着きがないために社会生活を送るのに困難を伴う障害であって、知的能力に問題があるわけではないとされる。自閉症などにおいても、それは基本的に同様である。しかし、残念ながら、こうした発達障害についての知識は日本ではまだ周知のものとなっておらず、それゆえにさまざまな悲劇が生まれている現状がある。

さらに言えば、発達障害<sup>ひんたう</sup>ハندیキャップと見るのも正しくない。発達障害を持つ人々の中には目を見張る能力を具有する例があるのも事実である。

例えばウインストン・チャーチル（英国首相）、リー・クアンユー（シンガポール初代首相）、リチャード・ブランソン（英国ヴァージン・グループ創業者で冒険家）、ノーラン・ライアン（米国メジャーリーグ伝説の投手）、ウーピー・ゴールドバーグ（有名な黒人女優）、トミー・ヒルフィガー（ファッションデザイナー）、トム・クルーズ（ハリウッド俳優）らは「ディスレクシア」である（財団法人日本障害者リハビリテーション協会『読める』って、たのしい。）。また、現スエーデン王国国王のカール十六世グスタフ陛下もディスレクシアであることを公表している著名人の一人だ。

出世作『カクテル』やヒット作『ラストサムライ』で人気のトム・クルーズは、映画企画が成立して脚本が渡されると、それをスタッフなどの関係者に読み上げてもらい、自分の台詞のみならず出演者全部の台詞を暗記してクランク・インに臨む<sup>のぞ</sup>という。

また、織田信長や坂本龍馬、あるいは発明王トーマス・エジソンなどもLDであったのではないかと見られている。

一月二六日（月） 誕生日だからと学校へ行く。友だちから（誕生日の）プレゼントをいろいろもらって帰る。

一月二七日（火） 夕方、（明彦は町内の）保健センターにてカウンセリングを受ける。

友人からの誘いで勇気を奮い起こして学校へ行きました。実は、担当教諭から「あと十日間登校すれば進級するための出席日数が足りる」と聞かされたので、「通えるうちに行こう」と思ったのです。「ここで夢を諦めるな……」と自分を叱咤もしました。

また友と会話することが当時の僕にとって、最大の励ましでもありました。「来ようと思えば来れるじゃないか」と思った級友はいたでしょう。しかし、当時の僕は「何としても高校を卒業する」という執念で学校に行つたのです。そんな状態のとき、友人から誕生日の贈り物をもたらしたことは、本当にありがたいと思いましたが、帰宅するとまた得体の知れない不安が増し、一晩中、イライラが治まらなくなっていました。



一月二八日（水）「精神状態がおかしいから、どこでもいいので精神科の病院へ連れてってほしい」と明彦がいう。急だったが（職場の）休みをもらい、K病院の精神神経科で受診。夜に飲む薬を一週間分もらって帰る。

自分が何かの病気らしいことは僕にも分かりかけていました。寝ずに熟慮した翌朝、「学校に早く戻りたい」という一心で、母に精神病院行きを打ち明けました。ところが、病院での受診では具体的な治療は指導されず、薬（精神安定剤）を渡されただけで、僕の「不安」は何も解消されませんでした。

僕が精神科での治療と高校卒業に執念を燃やした理由は三つです。一つは、大学進学を目指したのに実家の農業も継がなければならず断念した、父の無念さを人伝ひとつてに聞いていたからです。

二つ目には、あと一年で卒業なのに、ここで高校中退をしてしまえば、親に経済的な迷惑をかけると思ったからです。これは後の話になりますが、僕は自分から希望して東京にある中央高等学院（青森山田高校のサポート校）へ転入して、一人暮らしをしたものの、そこで生活費を込め百万円を越える経済的負担を両親に負わせました。その申し訳なさもあって、何が何でも高校を卒業したかったのです。

三つ目は、当時の僕はスポーツに関わる仕事が将来はしたくて、スポーツトレーナーになる課程を学べる大学を志望していたからです。その夢を簡単に諦めたくない、追いつづけていたいと思ったのです。「未来に希望を抱きつづけられる自分でいたい」、その一心で通院をしたのです。ところが……。

この日、南雲は精神科医とのカウンセリングで徹底的に心を傷つけられた。「あなたは大学受験から逃げたいために入院を望んだんだろう。ここはあなたが逃げて来る場所じゃない。学校へ戻りなさい」と突き放されたのだ。

「この先生は何を言ってるのだろう、そんな理由で自分から入院を望むだろうか。僕は学校が好きで、友と会いたくて、家族に心配をかけたくないだけなのに」という落胆した気分になりました。気がつくとな僕は診察室の壁を叩き壊していました。自分の苦しみを少しでも示したかったゆえの、やむにやまれぬ行動でした。

それでも納得しない様子の精神科医に、それまで誰にも見せたことがない自傷行為の痕を見せました。高校二年の秋頃に煙草の火を押しつけた、左二の腕の火傷です。医師は黙ったまま火傷の痕を見ていましたが、それ以上何も言ってくれませんでした。そんな医者

の様子を見て、僕は思わず我を忘れそうになりましたが、母の顔を見て、その気持ちを抑えしました。破壊した病院の壁の修理費はその後に請求書が届きました。

二月六日（木） 二回目の通院。同じ薬をもらって帰る。

二月十三日（木） 三度目の通院。葉が増える。（明彦が）苛立つ。

二月十四日（金）（明彦の）イライラが治まらない。

南雲は絶望感が膨らみ、現実がどうなっても構わないと気持ち荒み、自分の感情の処理をできないままに部屋の壁を殴り、柱を蹴りつづけた（現在（〇九年六月）でも、実家の壁には南雲が当時傷つけ、穴を開けた痕が数か所残っている）。それでも気持ちの高ぶりが治まらず、近くの公園へ走り、樹齢数百年の大木の幹を拳の甲で何十回、何百回と殴った。

皮膚の表面が裂けて血だらけになりました。しかしそれでも痛みは感じず、高ぶった気持ち鎮まることもなかったのです。今考えてみれば、実はそうした行動は両親へのS O Sのシグナルであったように思います。僕はこんなに苦しいのに、なぜ親も分かってくれないのか。そんなわがままがありました。

普段は無口な父から強く叱られました。

「ここで終わっていいのか。中途半端だ。できることからしろ、後は自分で決めろ」  
多分、父も本音では心配してくれていたのでしょう。ただそれを素直に言葉に表せず、  
厳しい表現になったのでしようが、苛立ちまぎれに僕は父に抵抗しました。

するとそこに止めに入った母と僕が揉み合いになりました。軽く突いたつもりでしたが  
小柄な母が転倒しました。「あつ」と、内心思いましたが、もうどうしようもありません。  
すつくと立ち上がった母が無言で僕の頬を平手打ちしました。僕も平手で母の頬を殴り  
返しましたが母はめげずに打ち返して来て、「正気にもどりなさいッ」と叫びました。

いつも陽気に笑っている人、滅多に怒らない人、能天気なほど楽天的な人、というのが  
僕の母への印象でしたが、それが一気に覆るような母の激昂ぶりを見て、さすがに心が沈  
みました。母を殴ったのはそのときが初めてだったと思います。

おそらく、母に打たれた息子の頬に痛みはなく、母を打った南雲の掌に痛みが残ったはずだ。  
しかし、このときの南雲はそんな複雑な気持ちをも両親に伝えることができなかった。この騒動  
の結果、南雲は自ら精神科へ入院を決意することになる。

二月二五日（土） 午後になり、急患扱いでK病院へ行き、（明彦を）お願いして入院させる。

二月二七日（月） 入院手続きのために病院へ行く。

二月一九日（水） 私用の帰りに病院へ顔を出す。

二月二六日（水） 五十沢（いかさわ新潟県六日町）の、ばあ（母方の祖母。二〇〇九年七月二十三日死去）

が（明彦の）見舞いに行ってくれる。

二月二七日（木） 夜、（病室の）隣人のいびき鼾で眠れず苦しむ。

入院前にカウンセリングしてくれた医師の対応に満足できなかったので、気分は乗らないものの、治療して治るものならと入院しましたが、六人部屋の病室はひどいものでした。自分から望んだ入院でしたが、隣のベッドにいる五十代の人からは長く入浴をしていないような臭気が漂い、向かいの人は始終、意味不明の奇声を発していました。

夜を迎えると、ますます気持ちが落ち込みました。医師の定期的な回診の時間だけが安心できる、窮屈な生活でした。閉鎖的な病棟で、神経過敏だった十七歳当時の僕は、死について真剣に思いました。頭が狂いそうになるほど混乱しました。「死」という言葉が何万回も頭を過よぎったのは、この病室に入った最初の夜のことでした。でもその一方で「自分は絶対に死にたくない。やりたいことがある」と自分を叱咤しげしていました。

(南雲信子の証言) 明彦が入院したときに衝撃を受けたことがあります。それは入院している患者が服用する薬の多さでした。明彦も薬漬けの人生になるのではとの懸念を抱きました。息子はそのまま死んでしまうのか、と真剣に心配しました。病院の見舞いの帰り道、駅前を通学する明彦と同年代の子を見て、明彦を普通に通学させてやりたい、と思いました……。

現在、若者たちの間で使われている「普通」の意味の違いと考え合わせると、このときの母親の切ない気持ちを察するには勇気が要る。

一二月二八日(金) 何度も電話を寄越して、「死ぬ」とか、「頭がどうにかなりそう」とか、「苦しいときに来てくれないのか」とか言い、電話を切る。昼頃、落ち着く。(職場の) 時間休みをもらい病院へ。この夜から薬が変わる。

一二月三一日から一月二日までいったん退院して外泊。イライラしたときはデパス(精神安定剤)で落ち着いた。

二〇〇二年一月三日(木) 二日にいろいろ動きすぎたのか、またイライラが募る。夕方病院へ。夜になってようやく落ち着く。

一月四日（金）（明彦の）頭痛がひどくなる。

一月五日（土）～六日（日） 外泊。友だちと会う。担当医と話す。夜八時五〇分TELあり。眠れないと訴える。

僕はベッドでじっと何かを待つ時間に我慢できず、病室を抜けだし、病院のスポーツ施設の壁を殴り、大声で叫び奇声を発しました。病室内に閉じ込められることへの恐怖だっただと思います。閉塞感と自己嫌悪に責められて切羽詰まり、体育館への通路口ぐちにあった書籍棚のガラスを割ったのは、怪我を理由に退院させてほしいと思いついたからです。閉鎖病棟は軽度と重度の患者別に收容めいされる決まりでしたが、僕はそのときに暴れたせいで身体を拘束され、多感な時期に凄く惨めな気持ちみじを体験してしまいました。

怪我の連絡を受け、心配した母方の祖父母が見舞いに来てくれましたが、こんな姿を身内の人間にも見せたくないのです。「もう来ないでくれ」と、駆けつけてくれた祖父母おじいちゃんに悪たれを吐きました。本心は余計な気遣いきづかいをさせたくなかつたのです。

祖父母が見舞ってくれた日、南雲は尻に鎮静剤の注射を打たれて眠った。

一月八日（火）（病院で）心理テストの結果が出たので、医師の説明を聞く。精神病ではないと思われる。神経症ではないかとのこと。六か月で自然治癒するとの話だった。

一月九日（水）本人、とても元氣になり、退院できる見通しができ、夜もよく眠れるようになる。

今にして思えば、自分の悩みの原因が専門医からも明らかにされないのは承知の上で、それでも「僕の心の痛み」を家族だけには知っていてほしい、という足掻きあがに背中を押されて、精神科への入院を志願したのだと思います。

この時期以降、南雲の心境は変化しはじめた。単に自己嫌悪に陥たるのではなく、前向きに「この苦しみの元凶を徹底的に知りたい」と考えるようになった。それゆえに、南雲は何度も転院を繰り返すことになる。自分の置かれた状況の原因が解明されれば、治療方法も見つかり、将来への「夢の描き方」、あるいは「将来への生き方」が明確になると信じたのだ。

ところが病院の心理テストでは「神経症のようであり、半年もあれば自然治癒ちゆする」という宣告が下された。これによって、南雲はさらに迷いを重ねることになった。



この入院のとき、自分が「ディスプレイシア」だと分かっていれば、後に僕が体験する差別や錯誤も少しは違ったものになっていただいでしょう。しかし、退院はしたものの他人の視線は心に痛く感じられ、やっとなんとか高校へ通えるようになっても、通学の電車内は悪夢そのものでした。電車に乗っていると見知らぬ乗客が僕をじっと見ているとの錯覚に陥り、その恐怖から逃れたくなくて全身が鳥肌立ち、汗まみれになりました。自分の狂っている部分が外見に表れているのではないか。その「狂気」を見られて嘲笑されるのでは……という疑心暗鬼にがんじがらめになるのです。

この状況になるとすべてがマイナスに作用して、駅員もコンビニの店員さんも視野に入る全部の人が気に障りました。プラットホームで電車を待つあいだも背後の乗客が気になって、いつも一番後ろから乗車するのが当時の僕の習慣でした。

二月二日（土） 午前退院。

普通ならば、退院で解放された気分が嬉しかったはずでしょうが、僕は母がハンドルを握るクルマの後部座席で身体をシートに沈めていました。誰にも顔を見られたくない気分でした。何も解決していないと思い、微かな期待さえ抱けない心境だったのです。

国道十七号線の小千谷付近だったと思います。道路脇に雪が積もっていたことをわずかに覚えていきます。

時速五十キロ程度の走行で母が慎重にブレーキを踏んだとき、僕は後部座席のドアを押し開いて、凍りついた道路へ身を投げだしました。もうどうなっても構わない、と半分自棄けでした。生きていても仕方ないと投げやりでした。

その瞬間のことは詳しく憶おぼえていません。ただ、全身が冷たい道路上を滑って転がる感触だけが残っています。いまでもそのときの傷痕が背中にあります。後ろを走っていたクルマが避けてくれたので、僕は命が助かりました。

なぜこんなことをしたかといえば、一つには「このまま退院しても何の解決にもならない。また別の病院へ移らなければ」という焦りがありました。しかも厄介やっかいなことに、正氣に戻ると冷静に僕を見つめるもう一人の自分がいて、「お前はこの世に要らない人間だ。いなくなってもいいんだよ」という幻聴も聞こえたのです。正氣と狂氣が交互に僕の頭のなかを駆けまわり、ささやきました。

(南雲信子の証言) 私が運転するクルマの後部座席から飛び降りたあとも、明彦は家の二階から庭へ飛んだりする異常行為をしました。当然ですがそのたびに気持ちは動転しまし

た。このまま放っておいたら明彦がダメになる、と思い、その当方で十五年以上勤めていた仕事（湯沢町役場の保育士）を辞めようかと一時は覚悟しました。

また、東京で一人暮らしを始めた頃（後述）、「死にたいけど死ねない」とか、「今日も死ねなかった」と頻繁に電話を寄越したこともあり、正直、気が動転しました。でも、親の自分が取り乱しては息子の居場所がなくなる、と明彦に悟られないよう冷静さを心がけました。すぐに駆けつけてやりたいと焦る気持ちを抑え、今、側へ行ってしまえば息子の将来のためにならないと我慢しました。後で涙が止まりませんでした。

遠く離れて悩む息子の状況は、母親として身を切られる思いだったにちがいないが、その衝動を抑制したことに「母親の矜持」が垣間見える。高揚した感情に流されず無言のうちに息子の自立を促したのは、何よりも揺るぎない「母親の優しさ」なればこそではなかったのか。

一月一九日（土）明彦がインターネットで探した東京・高井戸（杉並区）にある自律神経相談室へ一緒に行く。治療をしてもらい、本人は気持ち楽になった様子。少しずつ、近くのカルチャーセンターで体を動かすようになる。

一月二一日（月）東京・池袋にある通信制の青森山田高校へ、（明彦と）見学に行く。その夜、

六日町高校の大塚先生にTELし、転入学について話す。

一月二四日（木）午前中、退院後初めてK病院へ行く。夜八時三〇分頃、大塚先生が来る。すぐに転校しないで二月に少し登校し、四月からそちら（青森山田高校）へ行つたらどうかとアドバイスをもらう。

一月二六日（土）明彦一人で東京・高井戸へ治療に行く。

南雲が当時、通うことを考えたのは青森山田高校の広域通信制課程・東京校であった（現在は渋谷に移転）。広域通信制課程は、その名のとおり、本校が所在する都道府県（この場合は青森県）以外に住所を持つ生徒も受け入れるものを指す。通信制であるわけだから、毎日、学校に通う必要はないのだが、自宅学習以外に一定の面接指導（スクーリング授業）を受けることが義務とされる。青森山田高校の場合、東京の他、札幌、山梨などに校舎があり、そのほかに「サポート校」と呼ばれる協力拠点でスクーリングを受けることもできる（南雲はのちに青森山田高校のサポート校である中央高等学院に通うことになる）。

南雲が青森山田高校への転入を考えたのは、将来のために大学受験資格の取得を目指したからだが、友との関係で人生の進路に決定的な差をつけられたくないとの思いもあった。「大学を断念するのは死んだも同然」と当時は信じたせいでもある。結局、南雲は転入先として、新

潟県立長岡明德高校の定時制を選ぶこととなる（後述）。

この頃の僕は何かに訴えていないと不安で堪らず、そこで自分の身体を傷つけました。東京へ治療に向いたのも、そんな自分の気持ちも鎮めたいからでしたが、同時に、地元から離れた場所へ行きたいという気持ちもあって、それには東京が適していると決めました。

東京への通院はいわば逃避の側面もあったわけだが、内実は、何かしなければ何も始まらない、との思いに駆られたのだ。東京・高井戸への単独での往復は、当時の南雲に得がたい体験となり、ほんの少し自信になった、と明かす。

でもコンビニで買い物してもレジに並べませんでした。突然、頭が真っ白になりパニック状態に襲われたからです。ところが、いつの間にかコンビニで客の少ない時間帯が事前に分かるようになったのはふしぎです。この時間は空いているから客に会わずに買い物ができる、との予知能力の感覚です。ただ、何も悪いことをしているわけでもないのに、他人との接触を避ける僕の生活感覚は異常だとの憂鬱は消えませんでした。

一月三十一日(木) ～ 二月一日(金) (明彦は母の実家の) 五十沢へ泊まりに行く。運動を始めてからずっと頭痛がするというので、急遽、午後きんぐきよに病院へ。粉の薬を止めてみようとのこと。

二月二日(土) 学校(県立六日町高校)へ行ってみようか、と言いだし、友だち、先生に連絡する。朝の始発で学校へ行く。髪を何とか黒くして(筆者注・その前は気分転換で髪を染めていた)二か月ぶりの登校。一時間目の授業を受け、二時間目は保健室へ行き、休む。先生と話をしたらしい。頭痛がするので大変な様子。午後三時に帰宅。また夜、友だち宅へ出かけ一泊する。

二月三日(日) 昼頃に帰宅。午後休む。夜、豆撒まきをする。

二月六日(水) 「倫理」の授業を受けるため登校する。

二月七日(木) 午後二時に予約してK病院へ通院。眠れるようになったので睡眠誘導剤は不要となり、朝・昼・夜の薬のみ。デパス(精神安定剤)を飲まなくなり頭痛が治る。

二月九日(土) 東京へ治療に行く。午後四時頃帰って来る。

LD(学習障害)に限らないが「発達障害」では、物の見方、物の把握が他の人とは違うケースが少なくない。つまり彼らが学習やコミュニケーションに困難を感じるのは、物や他人への感覚が他の人と違うためでもある。そのことを周囲の人間は理解する必要がある。彼ら自身

の知能が劣っていると見るのは大きな誤解である。彼らの違和感の本質を理解して、それに見合った適切な教育を行えば、社会にじゅうぶん適応できる可能性が広がっていくのである。

二月二日（月）（この冬初めて明彦は）スキーに行き、一時間半くらい滑る（場所は越後湯沢ナスパ）。

二月二日（火） 学校が休み。友だちと遊ぶ。

二月三日（水）～一四日（木） 登校。

二月五日（金） 発熱のため学校を休む。午後（体温が）三八度五分、夜三九度と高くなる。

二月六日（土）（明彦が）中山医院へ行く。インフルエンザA型とのこと。点滴してもらい、薬を五日分もらって帰宅。

二月七日（日） 熱が下がる。食欲はいま一つ。

二月八日（月） 少しだけだるさが残る。食欲はいま一つ。

二月九日（火） 夕方、中山医院へ行き治癒証明をもらう。

当時、僕の心身をリフレッシュさせてくれる唯一の時間がスポーツをしているときはずだったのに、大好きなスキーをしても僕の内心は常に前途への不安ではち切れそうでし

た。人生で自分の未来に薔薇色の夢を描く思春期に、将来どころか、「オレの明日はどうなるんだ」と灰色のままでした。その思いが強迫観念となって胸の底に横たわり、気が狂っても不思議でないほどの苦痛との闘いが続きました。弱気になると、誰かこのイライラから救ってほしいと願ひ、それには大好きな学校で友と会うのが一番だと思って思い切つて登校するのですが、過度の緊張からかえつて体調が悪くなり、愕然としました。

思うに、この時期、南雲が登校したエネルギーの源泉は、自分の存在を見失いたくない、自己確認をしたいという思いだったのではないか。

ただ、そのことの根源に南雲の明日への強い願望が窺い知れる。

二月二〇日(水) 登校するが昼食の弁当は食べられない。

二月二一日(木) K病院へ通院。(明彦が)一人で行く。

二月二二日(金) 期末テストを保健室で受ける。昼食を保健室では食べられた。午後三時頃、担任の大塚先生と明徳高校を見学に行く。午後六時頃、家に戻って来る。

二月二三日(土) 東京への通院に同行する。二時間の治療に疲れを見せる。

二月二四日(日) 午前中、ゆったり眠ったりしていた。



二月五日（月） テスト二日目。ほとんど休んでいる状態だったが、一応、机に向かっていたらしく、疲れた様子。バレーボールもしたらしく、教室で弁当を食べたとのこと。

二月六日（火） テスト三日目。少しやると休み、という感じだったらしい。

二月七日（水） テスト四日目。初めて部活（テニス部）に顔を出す。不安やイヤな気持ちになる相手にも悔しさはあったようだが、今までの気持ちとは違ったよう。

学校へ行けさえすれば友だちに会える。会えば話ができる。そうすれば孤立する不安を追い払える、と思うものの、現実には登校するという行為は、南雲にとって重荷でもあった。というのも、彼には記憶をストックしておく能力が他の人に比べて大きく劣っていたからである。

高校生になっても、翌日に着ていく洋服を前夜のうちに順番に着られるように並べておかないと、安心して眠れないのです。このことを友人の六割は知らなかったと思いますが、隠していたのは知られることで余計な思惑（差別も含めて）を受けるのが煩わしかったです。同級生の中には、僕の休みがちな態度に陰口を利いている者もいたようですが、僕も自分の症状を打ち明ける勇気がありませんでした。

二月二八日(木) 上級生の卒業式準備があつたらしいが、疲れてしまい、早退。五十沢(母親の実家)へ行つて休む。

三月一日(金) 一日中、休んでいたが、久し振りにバイク(五〇cc)でコンビニまで行く。夕方、友だちからTELあり。午後六時四五分の電車で六日町に行き、泊まる。

三月二日(土) 午後四時頃帰宅。

三月三日(日) 一日のんびり過ごす。

三月四日(月) ~五日(火) 学級対抗球技大会へ行く。

三月六日(水) 家で休む。定期券を一月分買う。

三月七日(木) K病院通院日。バイクで駅まで行く。

三月八日(金) 午前七時一六分の電車で学校へ。

三月九日(土) 午前七時三七分の電車で学校へ。一〇時過ぎに帰る。午後三時頃バイクで六日

町へ。友だち宅へ泊まる。

三月一〇日(日) 夕方帰宅。夜、友だちが泊まりに来る。

三月十一日(月) 朝方、友だち帰る。夜イライラが見える。

三月十二日(火) 家で過ごす。

他人にできることが自分にはむずかしい日常が不満の元凶だと知った南雲は、原因がどこにあるかがまったく分からず、常に心が落ち着かずイライラする。揚げ句に気持ちがいらいでパニック状態になる繰り返しで、無闇に苛立つ精神状態が日常となる。当時の本音は、とにかく普通に生活したい、というものだったが、南雲にはその「普通」があまりにも荷の重いものだった。

当時の僕は、唯一の親友と徹夜で話す時間しか心が和まなくなりました。ところが高三になる四月から僕は長岡明德高校の定時制に転入し、その親友とも別々の道に行くことになり、正直、寂しい思いでした。明德高校の定時制三年へ転入することで、僕の人生が変わるかど期待が膨らみましたが、それでもまだ自分の人生は将来どこるか明日も見えない。「お互い、頑張ろうぜ」と言ってくれた親友には感謝しましたが、一人になると無性に怒りが込みあげました。「オレの人生って一体、何だ？ 普通になりたいッ！」

三月二三日（水）（二階の部屋で）大きな声を出す。イライラ。夕方、K病院へ連れて行き、注射をしてもらう。

三月一四日（木）家で過ごす。大声を出す。イライラ。

三月十五日（金） イライラがひどくなり、「どうしたらいいんだ」「生きていてもいいことない」「窓から飛び降りたい」と言いだす。午前に仕事（保育士）から帰り、お父さん（南雲利己）とK病院へ。昼頃、帰宅。注射や薬はまったく効かず、炬燵を蹴ったり、二階から飛び降りるとか叫んでどうしようもなく、本人も入院を希望。午後四時三〇分に家を出る。午後五時一〇分、病院着。（比較的症狀の軽い患者を収容する）三階に入院。午後七時三〇分に（私は）家に帰る。夜、カウンセリングのK医師と話をし、少し楽になった、とTELあり。

この当時の南雲の思考回路は最悪だった。自身の存在への怒りが暴力的に全身を掻き乱し、正常な感覚が飛んで行ってしまった、と振り返る。そして思いもかけない突発的な行為に身を任せることになる。

僕の家は三階建ての造りになっていて、冬の積雪のための高床式なので一階は物置と車庫、二階が居間と台所、三階が家族の寝室と客間です。僕の部屋は二階の階段を昇った三階北側の突き当たりでした。春寒の日の「その行為」をはっきりと憶えています。正氣に戻ると僕は二階のベランダから飛び降りていました。不可思議な浮遊感が感覚的にあるだけです。何も彼も煩わしい重荷を捨ててしまったのだとは後で気づきましたが、

死にたいという欲望よりも、全身を縛る憂鬱な現実を消してしまいたいからだだったのだ、  
と思います。

二度目の自殺未遂だった。ベランダと庭との狭間はわずか一メートル。その狭い空間を垂直に南雲は飛び降りた。約三メートルの高さからジャンプしたわりに骨折はなく、当初は足の踵に鈍痛が走る程度だったが、これを契機に南雲の心の中に、「それでも生きたい」という切実な思いが芽生えてくるようになる。その意味では大きなターニング・ポイントと言えるが、当時の南雲にはそのことがまだ明瞭に見えていなかった。自殺未遂のあと、南雲は一晩だけK病院に入院することになった。

三月一六日（土） 午前中にK病院に行く。前日と別人のように元気になる。先生と話したことにより、気持ちの持ちようだということに気づく。まあいいか、と思えるようになり、外見は真面目でも中味はちゃんぽらんでいいんだ。そういうふうになったら、と言われたらしい。病院にいても仕方ないとのこと、退院してくる。帰りに（私の知人の）美容室に立ち寄り、本人と話をしてくる。踵が痛いと言うので、午後にはS整形外科へ。

退院した帰りに知り合いの店の席を借りて、母親と向き合いました。苛立ちが少し治まると、親に対して済まない気持ちがあふれてきて、真っ直ぐに視線を合わせられないまま時間が過ぎました。しかし、母親が正面から見つめてくれている実感が安堵感あんどかんとなり、僕にとつての救いになりました。なぜ、軽率けいそつにもあんな愚かな飛び降りをしてしまったんだろう、といった悔いを感じました。中学三年のときに好奇心で喫煙をし、高校に入つて母親の目の前で煙草を吸つたことがありました。自分の弱さを認めるのが恥ずかしい、幼稚な見栄みえでした。本心は、自分はこのくらい苦しいんだという内面を分かつてもらいたいだけだつた、とも説明できずに、自分の状況が摺めない現実に苛立つたのだと思います。

このときの母親は「馬鹿なこととは止めなさい」と言っただけだつた、という。退院の帰りのこの短い母子の対話に、自分を見守つていくくれる親の存在のありがたさを南雲は強く感じた。母の言葉は重くそして自分の考え方が少しポジティブな方向へと向かつていることを意識した。それが南雲にかつてないほどの「勇氣」を与えてくれた。

三月一七日(日) 一日、落ち着いて過ごす。

三月一八日(月) (明彦が)髪を染めてくる。N君という子が長岡の明德へ進む方向に決まっ

たらしい。

三月一九日（火）（明彦は）両足の踵がまだ痛いらしい。

三月二〇日（水）く二二日（木） ゆったり過ごす。

三月二二日（金） 夕方、担任の大塚先生が来宅。手続きのための願書と転入届の用紙を取りに来てくれる。

三月二三日（土） まだ足が痛むということで、病院へ行く。ヒビが入っている可能性があるらしいが、踵パットをして、痛み止めの薬をもらう。

三月二四日（日） 午後になり様子がおかしい。受験への不安と思われる。

三月二五日（月） 午後三時頃、（職場の）保育所へTELを寄越してイライラしている様子。

帰宅してK病院へ行き、注射をもらう。受験票が届く。四一四番。

三月二六日（火）（職場に）一日休みをもらい、様子を見ることにする。K病院へ行き、また注射を受けるが、大病院の先生の態度に（明彦が）イラつく。夜はよく眠る。

明德高校への転入を前にして、情緒不安定な時期でしたが、僕は、自分の明日に希望を持ちたい、希望を捨てずに自分が変われば、何かが変わるかもという期待がありました。現状から変わりたいとずっと願っていましたし、中途半端な不登校のままでは僕の状況が

変わらないことが分かりかけた時期でもありました。

それでも、K病院での専門医から言われた「逃げてここに来るな」みたいな言葉がトラウマになり、思い返すたびに傷つきました。僕はそんな中途半端な冷やかして苦しんでいるんじゃないと。その日、病院の帰りは母と気まずい沈黙がつづきました。

三月二七日（水）朝は落ち着いた様子。いい（精神）状態で長岡明德高校へ出かける。朝七時一六分発の電車に乗る。

三月二八日（木）午後、（明彦が）合格発表を見に行く。午後三時過ぎ、「受かった」と連絡入る。

三月二九日（金）入学説明会に保護者同伴とのことで、お父さんとN君親子と四人で車で出かける。一日がかり。

三月三〇日（土）午前中、六日町高校へ行き、大塚先生、高橋先生と話してくる。夕方、（明彦の）同級会。

三月三一日（日）朝方、戻ってくる。疲れた様子。

発達障害などの分野で先進国の米国に合衆国公法（P.L.九四—一四二）が制定されたのは



一九七五年のことである。この法律によって、「LD」という診断名が社会的に認知されたといってもいい。この法は「LD」をはじめとするさまざまな障害を持つ子どもが無料で適切な教育を受けることを保障している。二〇〇〇年においては米国全体で一二パーセントの子どもがこの法律の適用を受けているというが、そのうちの約半数が「LD」なのだという。

一方、日本においては、軽度の障害を持つ児童生徒が通常学級に籍を置いたまま、障害に応じた特別の指導を受けられる「通級による指導」が実行されることになったのは、一九九三年度からだ。しかし実態は思ったほどに普及せず、世間での認知度が低いままという実相がある。しかも、LDやADHDの児童生徒が通級による指導の対象になったのは二〇〇六年度からにすぎない。「特殊学級」（現在は「特別支援学級」と呼称されるが、実体は本質的に以前と同じ）で授業を受ける現状を脱し、個別的な指導が行われることが急務に思う。

**僕は、字が読めない。 小菅宏著**

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社  
定価 1,500 円（税込）  
ISBN 978-4-7976-7193-3

ウェブでのご注文は [こちらにどうぞ!](#)